

地域の中の「小さな動機」を発掘し、その歩みに伴走する。東近江プログラムオフィサーの役割

ーローカルSDGs構築セミナー 第1回講演編 開催レポートー

[地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業](#)では、地域の環境・経済・社会を元気にしたいと考える人たちが、一步を踏み出す「きっかけ」や「学び」を得るためのセミナー「ローカルSDGs構築セミナー」を開催しています。

第1回講演編では、公益財団法人東近江三方よし基金の山口さんをお招きし、『地域づくりをリードする、地域コーディネーターの役割とは』をテーマにお話しいただきました。

その内容をレポートします。

山口 美知子(やまぐち みちこ)さんプロフィール

公益財団法人 東近江三方よし基金 常務理事 / 東近江プログラムオフィサー

滋賀県生まれ。東京農工大学大学院修了。1998年に林業技師として滋賀県入庁。林業事務所、琵琶湖環境政策室などを経て、2012年3月滋賀県を退職し、東近江市職員となる。

2019年から創設に関わった公益財団法人の常務理事に就任し、2021年3月に市役所を退職。その他、一般社団法人kikito、NPO法人まちづくりネット東近江等の活動に参加。

山口:講演のタイトルに「地域づくりをリードする」ということが書かれていますが、私は自分のことをリーダーであるとは思っていません。

私の役割は「プログラムオフィサー」です。

「東近江プログラムオフィサー」とは、地域にいる皆さんの想いとリソースを繋いで、課題解決をサポートする専門家のことであると、定義しています。地域には、ありたい姿の実現に向けて「何とかしたい」「新しいことを始めてみたい」と思っている人がいます。その人たちと、想いを形にしていくための資金・場所・ノウハウなどのリソースをつなげるのが私の仕事です。

今日は、主にプログラムオフィサーとしての私の活動をご紹介します。

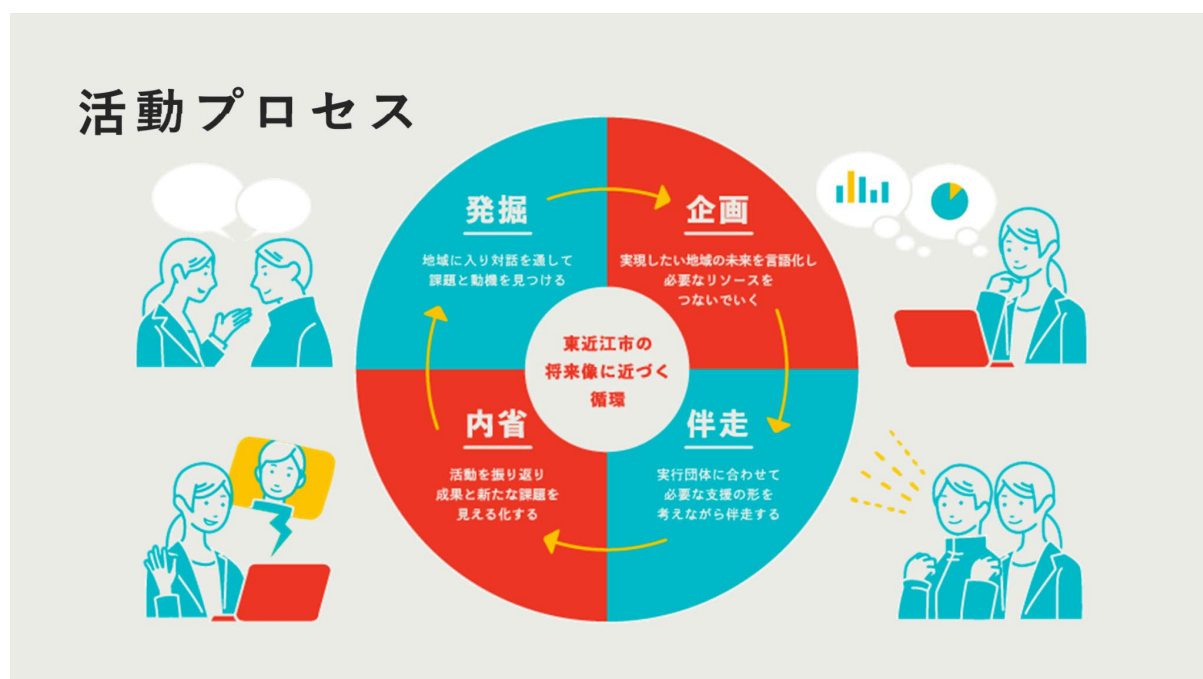
「発掘→企画→伴走→内省」プロセスをぐるぐる回す、東近江プログラムオフィサーの活動

東近江三方よし基金は、滋賀県東近江市で、持続可能な東近江をつくるための公益活動を支援しているコミュニティ財団です。

財団の目的は、地域資源を生かしながら地域課題解決をすることです。私たちの町には、「2030年東近江の将来像」という、地域の皆さんと一緒に作った地域ビジョンがあり、それを実現するために、様々なテーマの応援をしています。

具体的には、「社会的事業者」と呼んでいる、地域の課題の解決のために行動したいと考える事業者さんと、その人たちを応援したいと思っている支援者の方を繋いで、社会的事業を実現するための支援をすることがプログラムオフィサーの役割です。

プログラムオフィサーの活動には、大きく4つのステップがあります。



<STEP1:発掘>

日々地域で活動をしていると、地域の皆さんから様々な声を聞きます。

例えば、あるNPO法人の方から、「難病の方々が公的なサービスを受けられておらず、そんな方々が相談して生きがいを見つけられるような場所がほしいんですよね」という声を伺うことがありました。

また、「一見分かりにくい障がいを持つ子どもたちは、普通のスポーツクラブに行っても続けられないんですよ」ということを聞いたこともあります。

私たちは地域の中に入って、地域の皆さんと対話することを通して、地域の課題や動機を見つけていきます。

<STEP2:企画>

その次に、実現したい地域の未来を言語化し、必要なリソースを繋いでいきます。

プログラムオフィサーは地域の課題を1つだけ解決することや、資金活用をゴールにしているではありません。「人と人」「人と自然」「人と課題」を繋げながら、より良い解決策を一緒に探すことを大切にしています。

<STEP3:伴走>

企画の次はそれを実際に動かしていきます。その時、私たちは先頭に立って引っ張る役割をするわけではありません。主体者の隣にいて「最近どう？」と声をかける、伴走役です。

企画を計画どおりに進めることよりも、主体者が「何を実現したかったか？」を見失わないようにすることを大切にしています。

何かをやっていると、「どこを目指していたんだっけ？」と途中から分からなくなって、迷子になることはありませんか？「現実解ばかりを探していたら、気付いたらゴールと全然違うところに到達していた」なんてことが起こらないように、私たちは伴走しながら「あそこに行こうって言ってたよね？」と声をかけ続けます。

<STEP4:内省>

活動が終了したら、活動を振り返り、成果と新たな課題を見える化します。

活動を通して実現したいことは、簡単に達成できるものではないことが多いです。そのため、「いまどこまで来ただろう？」「あとどのぐらい道のりが残っているんだろう？」を一緒に整理しながら、次の活動や資金調達について考えていきます。

補助金を出して、活動をして、活動報告をして終わり、という短期的な関係性にはしたくないと思っています。

なので、三方よし基金の中では、STEP1～STEP4は常にグルグル回っています。地域の中では、色々な方が何か新しいことを始めていたり、何か次のチャレンジを考えていたり、困難を抱えていたりします。この状況を常に見守りながら、「この人を助けてくれる人が、どこかにいないだろうか？」を考えています。

行政では取り組みが難しいことも、市民主体の「小さな自然再生」ならできる

ここからは、具体的な事例を紹介します。

はじめは、ある漁協の方の「子どもたちにビワマスを見せてあげたいけど、それには魚道が要るんだよね」という言葉から始まりました。

琵琶湖にいる固有種のビワマスという魚は、産卵のために川に登ります。ですが、川に堰堤(えんてい)があるために、それよりも上流に登ることができません。子どもたちが立ち入ることができる場所は堰堤よりも上流にあるため、ビワマス子どもたちが見ることができませんでした。つまり、漁協の方の声は「堰堤の上にビワマスが行けるようにするために、魚道をつくれな

もう一つ、あるNPO法人から「森の横にある愛知川に子どもたちを連れて行ってあげたい」という声もありました。

こうした環境教育のような活動は、「行政でやれないのか？」ということによくなります。ですが、行政には「そもそも一級河川は県の管理である」「できるかどうか分からないのに予算をつけれない」など様々な壁があります。

行政にはできないことでも、声を上げた2人には「動機」があるので、どうやったらできるのかを考えます。

「小さな自然再生のような、市民でできることからやりたい」「様々な専門家に知恵を借りたら実現するんじゃないか」「まず試すことからやってみよう」こんな想いを聞いて、私たちは支援を決め、『小さな自然再生と絶滅危惧種の川ガキの復活』プロジェクトを立ち上げました。

資金集めは「東近江市版SIB」という仕組みを使い、地域の皆さんに出資をしていただきました。



昨年プロジェクトとしては、実際に魚道を作ったり、子どもたちと一緒にプログラムを作るための施工事業をやったりしていました。

このプロジェクトのパートナーシップを見える化したのがこちらの図(下図左)です。

4つ目の『社会福祉法人東近江市社会福祉協議会』では、コロナ禍で影響を受けている外国籍の方、生活困窮者、介護・障がい福祉事業者の支援を行っています。特に、外国籍の方が本当に沢山社協に押し寄せたのですが、私たちは休眠預金を使いながらサポートしてきました。

ここまでは、「新型コロナで困っているところに助成金を渡した」お話しですが、これには続きがあります。

私たちは、この4つの団体の取り組みのお話を聞きながら、「どうも共通している課題があるな」ということに気づきました。それは、支援対象者における外国籍の方の多さでした。今まであまり見えてこなかった、外国籍の方々の地域における暮らしを考えていけないんじゃないか、というような課題意識が地域の中で生まれました。

つまり、コロナ禍で地域における「多文化共生」の課題が明らかになったということです。

先ほど事例で紹介した4つの団体が目指すアウトカムの中に、「外国人支援・多文化共生」が共通してあることから、「4つの団体でこの課題について考えてみてはどうか」と私たちから提案しました。4つの団体がこれまで直接的な繋がりがなかったため、私たちから呼びかけて集まりを開始しました。

議論の中で、「言葉の壁」への対策が必要であることが明らかになり、医療機関や公的機関における翻訳ツールの整備を検討しているところです。

また、文化の相互理解の不足による孤独や孤立に対しては、『まちづくりネット東近江』というNPO法人が中心になり、取り組みを進めています。

地域の中の小さな動機を発掘し、伴走するために大切な8つのこと

ここまで、プログラムオフィサーの活動を、事例を通して紹介してきました。全てのことが、私一人でできることではありません。

現在、「東近江プログラムオフィサー」という肩書きで活動しているのは私を含めて2名です。ですが、これ以外の沢山の地域の方が、プログラムオフィサーの動きのようなことをやってくれています。これが、東近江の面白いところです。

最後に、東近江プログラムオフィサーが大切にしている8つのフィロソフィーをご紹介します。

1つ目は「地域の活動者との丁寧な対話と理解から全てが始まる」です。

簡単に言うと、私は「雑談力」だと思っています。仕事でもプライベートでも、地域の中で人に会うことはあるじゃないですか。その時に「そういえば、最近あれってどうなっています？」など質問をするといろいろな話しをしていただけます。これから実は、全てが始まっていると感じます。

2つ目は「地域への想いや熱意を持ち続けることが活動支援の原動力となる」です。

地域や誰かのために一生懸命活動している人たちというのは、実は地域に本当にたくさんいます。そんな方々の想いや熱意に触れると、何とかして応援したいという気持ちが芽生えます。これこそが、プログラムオフィサーの原動力になっています。

それだけではなく、この原動力って、地域の中の他の人たちの中に芽生えさせることもできますよね？なので、私たちは「この人の話をもっといろいろな人に聞いていただきたい」と思う時には、場をつくったり、人に紹介したりするようにしています。

3つ目は「常に課題とリソースの組み合わせを考え続けること」です。

課題がある時に、簡単にスマートな解決策が思い浮かぶなんてことはほとんどありません。なので、色々な課題を常に頭に置いておいて、地域のリソースの可能性を常に探しながら、「もしかして、こないだ聞いたあの課題、なんとかなるんじゃないか？」「この人がいたら解決してくれるんじゃないか？」ということを考え続けるのが私たちの仕事です。

これがうまく繋げられた時の幸福感はすごいです。何よりも、地域で活動してくださっている方々の夢が叶うことが、私たちの希望です。

4つ目は「助成金ありきではなく可能性から案件を作り出すこと」です。

私たち基金は、様々な助成金を扱うことが多いです。

助成金があると「助成金があるんだったら、あんなことをやってみる？」と、助成金起点で案件を作ろうとしてしまうこともあると思うのですが、それは絶対にやらないことにしています。

地域の中の雑談からいろんな可能性を見つけ出して、それを起点に案件を組成していく。そこにどんなお金を組み合わせると良いのか考えることは、プログラムオフィサーの腕の見せどころだと思っています。

5つ目は「連携しながら地域課題を解決することで地域力を高める」です。

これは実は、私たちもこの5～6年間活動してきてやっと分かってきたことです。

1つの課題を見つけてそれを解決する取り組みをした方は、次の課題に気が付いたり、別の方のSOSを拾う／別の方の夢を拾うことがすごく得意になります。それによって、「この人、こんなことを考えているんですよ。だから山口さん、1回話を聞いてあげてほしい」という声がたくさん届くようになってきました。

地域のエコシステムってこういうことなのかな、これが「地域力」なのかな、と最近感じているところです。

6つ目は「新しい担い手の発掘と支援の連続が地域の未来をつくる」です。

地域の中には、実行力をすでに持っている団体も少なくありません。ですが、実績のある団体ばかり支援していると、地域の力って先細りしていきませんか？

なので私たちは、下手くそでもいい、とにかく動機や夢を持っている方を見つけることに注力するようにしています。

そうした方と、実績のある団体さんを繋げて「何とかこの取り組みを育てていこうよ」という空気を地域の中で作っていくことが、地域の未来をつくることに繋がっていくと思っています。

7つ目は「計画遵守より、何が大事なのかを重視すること」です。

私は行政の経験上、「最初の計画をそのとおりに進めていただけのが良いこと」、「計画を変えることは、何か失敗をしたから」というイメージがどうしてもありました。

SIBを通して成果主義でプロジェクトを応援することをやっている、計画どおりにやるということよりも、目指していたゴールにちゃんと到達する、そのゴールに近づくということが一番重要だということが、だんだん分かってきたんですね。だから、「何が大事なのか」を、地域の方々と一緒に見つける作業がとても大事になってきます。

また、必要であれば一緒に計画の見直しや軌道修正することも大事な支援です。先ほどもお話ししましたが、プロジェクトは迷子になりがちです。そうならないように、目的地を確認するようにしています。

最後、8つ目は「地域の小さな火が消えないよう寄り添い続けること」です。

そもそも、「何かをやりたい」という動機は、誰しもが持てることではないかもしれません。なおかつ、それを誰かに話してプロジェクトにしようなんて思う人は、ごく少数派だと思ったほうがいいんですよね。

でも、そんな人たちに対して、私たちは選考会などの場で「あなたの取り組みは採択」「あなたの取り組みは不採択」という審査をしますよね。これって、落とされた側としては、ものすごいショックなんです。本当にショックで、せっかく持つことができた動機をゼロに戻される、何ならマイナスに持っていかれるくらいの出来事なんです。

私たちは、動機がゼロやマイナスになることを、何とかして避けたいと思っています。小さな火のような、「やりたい」「何とかしなくてはいけない」という気持ちを、守りたいんです。

なので、不採択の方々のところに伺って、「あなたの取り組みや提案が駄目だったんじゃなくて、今回の助成金があなたの活動に合わなかっただけなんです。ごめんなさい」と言いながら、丁寧に寄り添うようにしています。

また次に「何かを始めよう」と一歩腰を上げるのは本当に大変なんです。だから、とにかくこの小さな火——たまたま見つけられた小さな火を、何とか消えないように寄り添い続けることはプログラムオフィサーの大切な仕事です。一緒に悩むことしかできない時も多いんですけども、「一緒に考え続けましょうね」という気持ちを伝えるようにしています。

ここまで、「発掘→企画→伴走→内省」というプロセスで私たちの活動をお伝えしてきました。

このプロセスは、地域のどんなことにも応用できるんじゃないかなと思います。比較的、狭いエリアを対象に「何かをやろう」「コーディネートをしよう」と思っておられる方々にとっては、本気でやろうと思えばできることです。

今振り返ると、公務員の頃もこれに近い動きをしていたと思います。東近江の中では、行政でも民間でも、いろいろな立場の方が、「発掘→企画→伴走→内省」の動きをしてくれています。

ぜひ、これを聞いている皆さんも、こんなプロセスやマインドで地域に関わっていただけたらありがたいです。

=====

「ローカルSDGs構築セミナー」をはじめとする、地域循環共生圏に関する情報を、メールマガジンで配信しています。ご関心のある方は、ぜひこちらからご登録ください。

【連絡先】メールマガジン事務局(いであ株式会社内)

mail@chiikijunkan.jp